

2024年10月6日
宮崎中部教会主日礼拝
代務牧師 岩住啓太

創世記 2:7
使徒言行録 1:1-5
「主に結ぶ聖霊」

【招詞】 イザヤ書 55：6-7

【讚美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【詩編交読】 詩編 38 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55：7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 1 「主イエスよ、われらに」

【祈祷】

【聖書】 創世記 2:7 使徒言行録 1：1-5

【説教】 「主に結ぶ聖霊」

〈救いのみ業を語り続けるキリスト者〉

イエスさまの救いのみ業は、今もなお続いています。2000年前に終わってしまったのではない。わたしたちは今もなお「神の時」にあるのだ。そう語るのはこの使徒言行録の著者であるルカです。ルカは、すでに『ルカによる福音書』を著しましたがそこで筆を置きませんでした。復活されたイエスさまが天に昇り見えなくなって、それで終わったのではなかったからです。

なおイエスさまは生きて救いのみ業を続けておられる。それをテオフィロという一人の人物に伝えるために、筆を取り続けました。これは、おそらくルカ一人の思いではありません。その当時に生きたキリスト者たちの思いでしょう。たしかに福音書や使徒言行録を書いたのはルカですが、しかし、その背後にはイエスさまの救いを語り続けるキリスト者たちがあったはずだからです。教会の思いがあったと言ってもよいでしょう。「テオフィロさま」（1節）と呼びかける言葉を通して、今朝わたしたちもこの思いに触れます。「イエスさまの救いのみ業は、今もなお続いている」。

〈復活されたイエスさまがなさったこと〉

3節を見ると復活されたイエスさまがなさったことが記されています。

「イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日わたって彼らに現れ、神の国について話された」（3節）

まずイエスさまは、使徒と呼ばれる弟子たちに、ご自分が復活されたことを示されたようです。でもそこには「数多くの証拠」が必要とされていました。もちろん復活それ自体が受け入れ難いことであったのだと思います。事実、弟子たちは、復活のイエスさまの目撃証言を聞いても信じませんでしたし、復活のイエスさまを見ても「剪定をしている庭師」や「幽霊」と勘違いしていました。

でもぼくは、弟子たちが復活を受け入れられなかったのはそれだけではないと思います。弟子たちは、あの「十字架の失敗」につまずいたままだったからだと思います。自分たちが見捨ててしまったせいでイエスさまが殺されてしまったという後悔。あるいはイエスさまと同じく自分たちも迫害されるかもしれないという恐れ。自分が人生をかけて信じてきたものが失われてしまったという虚しさ。そのような失意の中で、彼らはもう前に進めなくなってしまう。自分たちの過ちから逃れられなくなってしまう。弟子たちの「生きる時」はあのゴルゴタの丘の十字架で止まってしまっていたんだと思います。

〈時が止まる〉

これは、わたしたちも経験するところだと思います。

自分の大きな失敗や挫折、不幸な出来事に直面するとき、いつまでも過去を引きずってしまいます。後悔や恐れが、あるいは虚しさがいつまでも自分をとらえ続けて、前を向けなくなってしまう。もちろん実際に、時間が止まるわけじゃありません。むしろ時間は――残酷にも――流れていきます。その時の流れに置き去りにされていくかのように、過去と捕らわれる。

ぼくも高校時代に大きな挫折を経験しました。

それまで育まれてきた自信のようなものがポッキリと折れてしまった。小さなことなのですが部活動だけが取り柄だった自分が、最後の大会ではレギュラーにもなれずに終わってしまったということがショックでした。部活動を引退した後もずっとそれを引きずっていました。高校ではやれ大学受験だというような前向きな雰囲気になっていましたが、切り替えられなかった。その場しのぎの気分転換でアルバイトをしてもみても、ふとしたとき

に同じ悩みを思い出す。漠然とした「虚しさ」がつきまといました。自分の生きる意味が分からなくなってしまった。周りが大学受験に向けて奮闘している中、自分だけがぽつりと取り取り残されてしまったような感覚は今でも忘れられません。

弟子たちの場合は、家も仕事も家族も捨てて、イエスさまに従ってきていました。ここにこそ希望がある。神さまの救いがあると信じて疑わなかった。そのイエスさまのためになら死ぬると言えた。そのイエスさまを自分たちで捨ててしまった。信仰の事柄であるからこそ、その失意はいよいよ深かったのだと思います。

〈時が動き出す〉

でも、だからこそ、復活のイエスさまは「数多くの証拠」（3節）をもって示された。あなたの信仰は、あなたの人生は、あの「十字架の失敗」では終わらないと。数多く。あの手この手で示してくださったのではないのでしょうか。イエスさまはただ自分を示されたのではありませんでした。「苦難を受けた後、御自分が生きていることを」（3節）を示されたのです。だからその証拠のひとつは「手と脇腹にある傷跡」だったはずです。そして「十字架で受けたこの傷によって、あの血潮によって、あなたの罪は赦された」と。復活のイエスさまは弟子たちに告げてくださったはずです。「神さまの救いは、あなたの過ちでは終わらないのだ」と示してくださったんだと思います。この復活のイエスさまと出会う出来事ほど素晴らしいことはないと思います。

そのとき、弟子たちのせき止められていた時間は再び流れ出したのではないのでしょうか。排水口に詰まっていたゴミがとれて、溜まっていた水が渦を巻いて流れていくように。過ちを引きずっていた「彼らの時」が流れ出したのではないかと思います。過去から解き放たれて生きることができるようになりました。イエスさまはその過去に捕らわれていない。その過去を赦して、今、弟子たちと共にあるんです。「罪の赦し」によって彼らは前を向いて生きるものとされたんです。

〈神の国の完成を待ち望む〉

復活のイエスさまは弟子たちに「赦し」を示すだけで終わりません。後ろ向きだった彼らを前向きにしました。もちろんちょっとした気持ちの問題ではありません。大いなる希望を抱くものとしてくださった。イエスさまが「神の国」について話されることによってです（3節）。弟子たちを「神の国の完成」を楽しみに待ち望むものにしてくださったんです。そうやってイエスさまは過去に捕らわれていた弟子たちを将来の希望へと向き直らせてくださいます。

これが本当の「悔い改め」なのだと思います。

悔い改めは、自分の罪を反省して、自分の過去にとぐろを巻くようにとどまることではありません。悔い改めの本来の意味は「方向転換」です。回る心と書いて「回心」とも表現されます。まさに、過去のあやまちを見つめるところから、わたしたちを将来の希望へと向き直らせてくださる。この大いなる方向転換こそが復活のイエスさまのなさることなのです。

〈主に結ぶ聖霊〉

このイエスさまは今も生きておられます。

たしかにわたしたちにはこの弟子たちと復活のイエスさまが出会った40日間のようなことは経験できません。復活の体をもっているイエスさまは天に挙げられたので見ることはできないからです。でもイエスさまは今も生きておられます。それをわたしたちに信じさせてくださるのが、4-5節に約束されている「聖霊」です。天に昇られたイエスさまが与えてくださる聖霊によって、わたしたちはこの弟子たちとイエスさまが会われたこの40日間と「全く同じような経験」をします。

わたしたちは聖霊の働かれる礼拝において、この復活のイエスさまに出会うのです。罪にとらわれたわたしたちに、十字架でつけられたみ傷をもって「赦し」を示してくださる。「あなたの罪は赦された」という赦しの宣言を聞く。あるいは、今なおイエスさまが生きておられる恵みを、説教をもって改めて受け止める。そればかりではありません。将来必ずやってくる「神の国の完成」を楽しみに待ち望む者とされていく。過去にとらわれたわたしたちを大いなる未来へと方向転換させてくださるのです。止まっていた時間は、いつもこのイエスさまとの出会い動き出すのです。

この聖霊は、5節にあるように「洗礼」と結び付けられています。わたしたちは受洗するときに、たしかに「聖霊」を与えられるものです。洗礼は、イエスさまとわたしたちを結びつけ、わたしたちを救う聖霊の大きな働きするときです。

しかし、わたしたちは受洗前にもすでに聖霊の導きを受けています。それは、今日の1-2節で表されています。イエスさまは天に昇られる前から弟子たちに聖霊で指図されていたのです。彼らは、いつでも聖霊によって導かれていたといってもよいかもしれません。聖霊は受洗前から、わたしたちをイエスさまに出会うように導いてくださっているのです。神さまの御業は、今なお続いているのです。

〈イエスさまとの食事と伝道〉

今日の箇所では、復活のイエスさまと弟子たちは一緒に食事をしています。

この食事は、弟子たちにとっては自分たちが赦されているということをより深く実感したひとときになったと思います。もしイエスさまに「うらみつらみ」がおありなら、一緒に食事などするはずがないからです。「わたしは本当に罪赦されている」。そのことを実感することになった食事だと思います。そして、その食事をしながら「神の国」についての話を聴き、その完成を待ち望む。この食事は、わたしたちの礼拝における「聖餐式」にほかなりません。

聖霊がはたらくこの食事は、ただの食事ではなく、イエスさまの食卓です。洗礼によって聖霊をうけ、その信仰を告白した者しか食べることができません。というより、そうしなければ意味がないでしょう。イエスさまが今なお生きておられることを信じていただくときこそ、この食卓は、あの復活のイエスさまとの40日間の食事と重なるのです。「本当に罪赦されている」それを実感しつつ「神の国の完成」を仰ぎみさせていただくのです。

この聖餐こそが伝道です。この聖餐は「主の死を告げ知らせます」。イエスさまの赦しをそこにある希望と安らぎを証し続けるのです。

わたしたちは過ちと後悔を繰り返し、それだけ過去に捕らわれてしまいます。しかし、それはわたしたちだけではありません。世の人々こそが、過去に縛られた苦しみを抱えておられます。だからこそ、その罪を赦し、前を向かせてくださる復活のイエスさまを証したいのです。テオフィロのためにルカが書き続け、キリスト者たちが語り続けたように。わたしたちも、神さまの救いが今なお続いているということを証し続けていきたいと思えます。そして聖霊の導きを信じ、一人でも多くの方々と共に「神の完成」を目指す歩みをなしたいと願います。

【お祈り】 天の父なる神さま。後悔や挫折、過ちがわたしたちを過去に縛り付けます。わたしたちもそこに留まり続けてしまっていました。しかし復活のイエスさまはその罪を赦し、わたしたちに前を向かせてくださいます。さらには「神の国の完成」という大いなる希望を仰ぎ見るものとしてくださいました。感謝いたします。どうぞ「神の国の完成」を楽しみに待ち望みつつ、わたしたちを主の御用のために用いてください。この救いの喜びに一人でも多くのものを招き入れてください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

【讚美歌】 339 「来たれ聖霊よ」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】

【讚美歌】 77 「パンくずさえ拾うにも」

【十戒】

【献金】 65 - 1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。 主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。 主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように。 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。 アーメン